
ターンオーバー（私家版）

樋川真次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ターンオーバー（私家版）

【Nコード】

N7277C

【作者名】

樋川真次

【あらすじ】

夢の話は脈絡がなかったり自分に都合のいい物語の場合が多い。

第1話 夢

未だによくわからないことなのだが、夢で見たことのリアリティとはなんとも実感の濃いもので、なぜそれが現実のことではなく夢だとわかるのだろう。

夢の内容を克明に覚えている人もいれば、目覚めてしばらくして夢を見たこと以外にその内容を覚えていない人もいる。

佐々木雅之はよく夢を見る。だが夢を見たことは覚えていてもその内容は覚えていない。

彼の夢で共通するのは必ず元カノが出てくることである。

夢の中では雅之と元カノの平山あきよは大抵セックスをしていて、それも激情のおもむくままひたすらあきよは大きな声で叫び、雅之は激しくあきよにむしゃぶりついている。

現実の世界では雅之は細々とホットドックを売って日銭を稼ぎ、あきよはタンザニアに動物の生態調査に行ったきりである。

だが雅之の夢の中では二人はベッドの中である。

タンザニアに調査に行く前の晩はげしくセックスしてからあきよは別れを切り出した。

どうしても生物学の論文を書くためにその調査は必要で一度調査に出たら10年は日本に帰ってはこれないだろう、だから別れよう。そう言っであきよは雅之から目を背けた。

ではなぜ雅之はあきよを引き留めなかったのだろう。

相手のことをおもんばかりだけが恋愛ではない。恋愛とは本来残酷なもので、その人の人生を大きく狂わせる場合だってある。

自分の夢と恋愛を秤にかけたあきよは夢を取った。

ロックミュージシャンや芸能人が下積み時代につきあっていた恋

人と売れ出すと別れることがあるように恋愛とは実に残酷である。

関西国際空港からドバイを経由してダルエスサラームまでの航空券を手にしたあきよは国際線出発のデッキまで見送りにきた雅之に熱くハグすると振り向かずに飛行機に乗って行ってしまった。

以来雅之はホットドッグを売っている。

第2話 常連客（前書き）

歲月は無常。時間が悲しみを癒すもの。時間薬はよく効く薬。

第2話 常連客

ホットドッグを売るのは結構骨が折れる。

買いに来る客においしいホットドッグを出さないと悪評が立つて商売はあがつたりになる。

かといってとても儲かるかというとそうでもない。

高岡みちるはいつも和泉丘駅前でホットドッグを売っている雅之を見るとはなしに見ていた。

黙々とホットドッグを売っている時も、暇そうに佇んでいるときも知っている。

みちるは一度ハラペーニョソースのホットドッグを買い求めたが、お世辞ではなく雅之のホットドッグは美味い。

そのせいか、雅之のホットドッグ屋はそこそ繁盛していた。

みちるは雅之が気になって常連になっていた。

商売トークの上手な雅之はみちるが仕事から帰ってきてホットドッグを買い求めると暖かく応対して今日は疲れたんちゃうん、スイートチリにしとかとか、今日は寒いなあ、レッドチリにしとかとか言ってみちるの心を和ませていた。

雅之が元カノと悲しい別れをしたとはみちるは思いもしない。

みちるがなんとなくいい人やなあ、雅之さんというんか、と名前を覚えたのはホットドッグを買い始めて4ヶ月が過ぎた頃である。

雅之はみちるのことを、よく自分のホットドッグを買ってくれる常連さんの女性で眼鏡の似合う落ち着いた美人で買いに来たら必ず雑談をする人、という認識をみちるに持ったのはみちるが雅之のホットドッグを買い始めて半年が過ぎた頃だった。

その頃から雅之の夢にあきよが出てくるのが目立って減ってきた。
かわりにみちるがよく夢に出てくるようになった。

第3話 才媛

檜村さえは焦点の定まらない目をして部屋の照明を点けた。

時間は深夜2時。マンションの下のコンビ二に降りていくと外は小雨が降っていた。

コンビ二でおにぎりを買うと外に出てコンビ二脇のゴミ箱におにぎりの包みフィルムを捨てておにぎりを食べ、寝ぼけた頭で自分は今は高校生だと思い直していた。

今日は漢文とリーダーと日本史と数学とあとなんだったつけと違ってさえは日本史の論文を手にとってこれはいまは必要なかったっけと思って本棚に直し、そうだった物理だったと思い出した。

PCを立ち上げてネット小説を読みながら自分の通う北和泉高校でのことを思い出していた。

大学院を出てから訳あつて高校生をすることになったさえは童顔の自分がこの場合穩当に作用しているのだろうと思って北和泉高校に通い出した。

リーダーの時間にリーダー担当の倉田に目をつけられてこの文章を訳せと言われた文章をよく読むと「すきやねん、ねぎま。」と書いてあり、誰一人その文章を訳せないでいるクラスメイトに「すきやねん、ねぎま。」やでと教えてまわつて倉田をへこませて、クラスメイトの自分を見る目が一部はやつかみ、大部分は一目置いてという評価になつてからさえは少し高校に通うのが嫌になり出していた。

さえが大学院を出ていることは当然クラスメイトは知らないからよくできるやつという印象を持たれ大学院での専門であつた日本史ではそもそも地歴の教員免許を持っているさへの成績がよいのは当たり前で、担当の水原がよくできる生徒だとさえのを見ていたとはなんともおめでたい話だった。

和泉丘駅前のホットドッグスタンドでホットドッグを買い求める

と随分美味しいホットドッグなのでさえは目を大きく見開いた。

おにいさんうまいで。おにいさんのホットドッグ。と思わず言うていた。

第4話 名刺（前書き）

基本情報は公開されているとはかぎらない。一番確実なのは教えてもらうことだ。だが教えてもらえること以上のことはすぐにはわからない。

第4話 名刺

改札口の方から悲鳴と逃げ惑う人が居たかと思うと日本刀を振り回して一升瓶をあおっている男が雅之の方に近付いてきた。

雅之は男の日本刀を白刃取りして組伏しつつ、警官の到着を待った。

みちるとさえはその様子の始終を見ていた。

みちるはまるでヒーローを見るかのように色めき、さえはやるやんお兄さんという表情で制服を整え直した。

警官に男を引き渡すと何事もなかったようにホットドッグスタンドに戻ると人が集まってきた。

こわなかったん？だとか、いやあすごいやん。とか口々に言われた雅之は、いえまあと言ったあとホットドッグいかがですかと言ったので、ホットドッグは飛ぶように売れ、人波が去るまで目まぐるしく雅之はホットドッグを作って売った。

みちるが目をはあとにして雅之に近付き、握手してくださいとプロ野球選手みたいな扱いでそう言うのをさえは見て、カバンから数学のノートとペンを出し、サインしてもらえませんか？と雅之に言った。

握手もサインも応じた雅之は少し照れて、みちるとさえにジュースを手渡し、奢りです。と言った。

みちるは眼鏡の似合う落ち着いた美人で、さえはかわいい系で現役女子高生の上に女子高生とは思えない程色っぽく、雅之は暴漢を取り押さえただけでこんなことになるのかと素直に状況を楽しんでいた。

さえはサインを見て佐々木雅之という名前だとわかり、雅之に自分の檜村さえという名刺を渡した。

それを見たみちるは名刺を取り出して雅之に渡した。

雅之はさえの名刺もみちるの名刺もそれぞれ両手で受け取ると、ふたりともおなまえがひらがなですねと言い、みちるとさえはお互いの名刺を交換してそのことに気付いたようだった。

第5話 月光（前書き）

事実を著述することは著作権法には違反しない。

第5話 月光

仏教思想、唯識論と三島由紀夫の暁の寺には関係があると現代文の授業でさえは聞いた。

アーラヤ識という第8識によってすべての事象は統合的認識を見る。ん？

たしか豊饒の海4部作は輪廻転生というキーワードと色事という動向が綾なす物語で、三島由紀夫が発表した初版本の暁の寺を読むと口語文体で漢字は旧字体。もはや平成の日本人には古典文学か古文書でしょうが。

さえはそう思いながらその話を聞いていて、現代文の教師、岩富照子に聞いた。

「全共闘世代の芥川賞作家の芥川賞受賞作ですらいまや時代小説ですが、それより古いか同時代の三島文学はそもそも現代文学というより古典文学ではないのでしょうか？」

岩富は目を見開いて言った。

「お読みになりました？」

「は？」

「いえ、暁の寺ですよ。」

「ええまあ。アーラヤ識の話の下りとかにかなりのページが割かれてますね。」

「まあ、そうですが、ジン・ジャン姫には双子の妹が居て、その妹からジン・ジャン姫はコブラに咬まれて死んだというくだりで終わります。」

「ところで、さらに岩富先生。」

「なんででしょうか。」

「三島由紀夫という作家は個人的感想から言って文豪と呼べるレベルの作家だと思うのですよ。」

「そうでしょうか。テロの末に割腹自殺ですが。今で言う自爆テロ

ですよ。」

「ノーベル賞作家の川端康成は犯罪性のない自殺ですが。」

「輪廻転生という思想は前世、現世、来世と生まれ変わるという発想で、縁とは前世でも現世でも来世でも縁があるということです。」

さえははい。と言って特に質問は以上ですと言って黙った。

授業はその辺りで終了となった。

第6話 圓徳院（前書き）

初冬の紅葉は雅でおじやる。

第6話 圓徳院

さえはみちるとバリスタでお茶をしばいていた。

しばくというのは大阪言葉で、悪い意味に使われることも多く、単にしばくという時は殴るぞとか暴行するぞという恫喝文句だったりする。

だが、お茶をしばくというとお茶を聞くという実に雅な行事になることがあり、「しばく」という言葉自体にはもともと「する」という意味しかなかったようである。

「さむうおじやる。」

「なに、そのおじやるって。」

「雅語。」

「いえまあ、ご飯を食べるときとかわたし、ごはんでおじやるとか言っと、母が笑って、おあがりよし。って言われて育ったので、おじやるとかいう癖がついてるのよ。」

「そういえばさえって古くさい言い回しとかよく知ってるし、解読不能な古文書とか読めるもんね。どこで覚えたの？」

「いや、内緒にしといてね。わたし今は女子高生だけど修士号と高校の教員免許持ってるの。」

「修士号？」

みちるはぶつと紅茶を吹き出しそうになった後にやっとそう聞いた。「なんで教員採用試験受けて教師にならないのよ。」

「大学院出てから高校で講師とかしてたんだけど、いまの高校教育界は日教組と全共闘世代のおかげでガタガタ。そんなところで神経すり減らしたら統合失調症になっちゃう。で、女子高生しながら物書き修行中。」

「学生でなければ産業廃棄物やん。」

「いやあ、わちはどちらかといえば腐女子の放射性廃棄物でおじやるよ。」

「な悪い。」

さえはふと窓の外を見ていった。

「昨日、お友達と圓徳院に紅葉狩りに行ってきたんだけど、よろし
おすなあ、あの庵。」

「どこそれ？」

「京都市東山区。」

「ああ。高台院ゆかりの？」

「よくそういう尊号を知ってるわね。北政所が勅旨された院号よそ
れ。」

「つつかそんな有名人、知らない人の方が少ないんじゃないかしら。」

「司馬遼太郎のおかげでねえよりもその家来の千代の方が今じゃ有
名人じゃん。」

「山内一豊の妻か。」

「浅野ゆづ子に仲間由紀恵って思ってる人多いよ。」

「大河ドラマの功名が辻って結構おもしろかったもんね。」

「篤姫とかもなかなかおもしろいよ。ああいうのって主演女優の演技
で決まるのねえ。平成の世は明るい、スピーディー、華々しきがお
よろしいようよ。」

「そつえば聞いたわよ、妹から。」

「なに？」

「現代文の教師を授業中にいじめてるって。」

「ああ、暁の寺？」

「縁の話でオチをつけたとか岩富先生。」

「まあ、ヨハネの黙示録とか言い出してたらもっといじめてやろう
かとおもったけど。あの程度、一般質問よ。」

「一般じゃない質問とかってあるの？」

「授業や討論の場で個別質問するなんて変態か馬鹿よ。結構居るけ
どそついうの。そついうのには暇なら教育的指導。忙しかったらハ
ンドアックス。」

「さえつてもしかしてテロリスト？ミサイルとか作ってる？」
「放射性廃棄物でおじやるよ。」
みちるは妙に納得した顔をした。

第7話 日の丸の由来

今日は日本史の時間に事件が起きた。

さえは、日本史の教員今西幸三が授業で言うことにぴくつと反応した。

「日の丸の由来をご存じでしょうか？」

「琉球人を殺してその血で薩摩の軍隊が白地の旗に赤く染め抜いたんです。」

さえは反射神経的に言った。

「平安時代からありますが日の丸。」

「檜村さん、どうしてそのようなありもしないことをおっしゃるのです？」

「先生こそ、日の丸を否定したいばかりに捏造なさってるんじゃないでしょうか？」

「わたしは仮にも教師です。嘘を言うつもりはありません。」

「では、その先生のおっしゃる日の丸の由来、どこに記録が残っているのですか？そんなに自明なら記録があるでしょう。まさか民間伝承ですか？」

「わたしの方は、続日本紀以降に日輪を旗にしたという記録を実際に文献でいくつも見てるんですが。」

「だから薩摩が。」

「おだまんなさい。歴史の捏造とかする暇があるなら、もっとまじな方法をとりなさいよ。」

今西幸三は顔を赤くして黙り、授業を途中で切り上げて教室を出て行った。

さえたちのクラスの次の日本史の時間。

「えー今西先生はストライキで授業をしません。自習です。」
さえは思った。

「逃げたか、日教組教員。」

「ねえ、さえ。今西先生、ストライキってなんでまた。」

「日教組教員って教師は労働者って立場だから、団結権、団体交渉権、団体行動権があると思うてるのよ。でも公務員って地方公務員法でストライキって制限されてるはずだけど。」

「ふーん。」

「歴史の捏造に失敗したからでしょ大方。」

「さえと顔を合わせたくないんだ。こつどもー。」

「だから日教組みたいところにいて、自分の給料がどこから出るか考えもしないんでしょうよ。」

第8話 B L小説とドギワ荘

みちるは花丸を読みながら、コーヒーを飲んでいた。

「みちる、なに、それ？」

さえが立っていた。

「花丸」

さえは表紙の男2人のイラストを見て言った。

「B L小説ってやつよね」

「うん。」

「好きなんだ」

「え？」

「B L」

「こういうのは、昔からあるのよ。衆道とか男色とか」

「でも、なんかさ、男同士で色事して楽しいのかしら」

「嗜好というものでしょうね」

「嗜癖のまちがいでしょ」

「でもさ、禅寺の師匠と弟子とかのものとかあればおもしろいかも」

「それじゃリアルすぎてだめよ」

「でも樋川真祈のシリーズとかあるじゃん」

「さえ、結構くわしいね」

「読んだことはないわよ」

「わたしは涼宮ハルヒよりはそっちの方がおもしろそう」

「それは確かに嗜好ね」

「どちらかといえばわたしは官能小説とかのほうがいいかなあ」

「やだ。えろい。」

「官能。エロじゃなくて」

「どっちがうの？」

「島耕作はエロ漫画ね。でも三島由紀夫の官能小説とかあるわよ」
「単に表現が古いだけじゃないの？」

「色欲を業と併せて織り交ぜるって官能小説だと思っけど」

「島耕作もそうじゃないの？」

「あれは女と行く先々でやるだけよ。そういうのはエロよ」

「ふーん。じゃあ、好色一代男は？」

「エロ小説かなあ」

「じゃ、源氏物語」

「陵辱シーンとかあるしなあ。あれ。色欲と業を織り交ぜるからぎりぎり官能小説かしら」

「ドギワ荘の盛春」

「ぎりぎりアウトよあれは」

第9話 学術論文

平山あきよが調査の中間報告を論文にするため一時帰国した。

大阪府立大学農学部のある南海高野線白鷺駅から大阪府立大学へとあきよは歩いていった。

農学部の大山徹教授があきよの訪問を受けていた。

「タンザニアですか」

「ええ。ビクトリア湖の近くで調査を」

「で、しばらく籍を置いて論文を書きたいとおっしゃいますが、それなら母校の島根大学とかに行かれてはどうですか？生物学教室もあるでしょう？」

「修士論文を書くときにアカデミックハラスメント受けたんです。

そのときの教授がまだ在職です」

「アカハラ？」

「ええ」

「データとPCとネットがあればいいので、大山先生の研究助手ということで半年ほど置いて頂ければその間に論文を仕上げてまたタンザニアに戻ります。あと図書館を使わせて頂ければありがたいですわ」

大山教授はふうと息を漏らし、窓の外を見た。

「調査はたしかライオンでしたね」

「ええ。繁殖行動の観察記録と父のちがう子ども同士の間グループでの成長記録がデータであります」

「父の違う子ども同士の？」

「よく新しいボス牡に殺されませんでしたね」

「それが雌の一部がかばうことが確認されました」

「それを報告できたらNature誌とかが食いつきますね」

「新説ですから。通説を覆すことになります」

「いいでしょう。来年の3月31日まででいいですか？在籍期間は」
「置いていただけるのですか？」

「学術の進歩に寄与するのは学者の義務です。どうぞ、研究室もご自由にお使いください」

「教授会で平山さんの論文に学校名を入れてもいいかどうか諮っておきます」

「ありがとうございます」

「母校で嫌な思いをなさったのに研究を続けてこられたあなたの希望です、かなえてさしあげないと」

あきよは立ち上がって深々と頭を下げた。

第10話 事前運動

佐々木雅之はホットドッグの売り上げを元手に串カツ屋を始めた。東深井駅前の飲み屋街の一角に店を構え、毎日淡々と芋や豚串を揚げた。

さえとみちるは雅之の店にやってきてカウンターに座り、串カツ2品と焼酎の水割りを注文して、しみじみと言った。

「雅之さん、このあたりって筋悪いって聞いたよ。いいの？」

「筋？ああ。悪いよ確かに。周りの他の店はぼったくるって、嫌がってこない人とか多いって言うなあ」

「雅之さんはボる気はなさそうね」

「ぼったくるならやり方があるよ。そういうのは趣味とちゃうねん」

「ふーん。そう言えば誰だっけ、衆議院議員の」

「辻元清美け？」

「そんな有名人じゃなくて、自民党の…」

「北側一雄は公明党やで」

「だから、あ、岡下信子」

「あの人はどうしたん？」

「なんで選挙になると当選するのよ、西村眞悟のおっちゃんと対戦成績2勝2敗のドローっていうやん」

「へーそうなんや」

「そりゃあ、学会票やろ」

「創価学会か」

「公明党の候補は立たん。17区は。16区が北側やから。17区はやつはみな16区に応援に行くねん」

「それでいったら眞悟のおっちゃんはいさぎよいなあ」

「そうかなあ」

「この前も和泉丘駅前で朝立ちしとったで。目があったんでビラもろて会釈したら演説中断して会釈返したよ」

「ふーん、ドブ板踏んでるんや、あの人」

「比例区でのライバルがあそこらしいってもっぱらの噂だけど」

「どこ？」

「ほれ、幸福の科学が政治団体作って出てるやん」

「近畿ブロックで3%って言われてるけどね、政党得票率での比例区当選のボトムライン」

「幸福の科学が近畿ブロックで3%も取れるか？」

「投票率次第やなあ。低いとあかんやろ」

「眞悟のおっちゃんとも似たようなもんかもよ」

「あんなカルトとえろう変わらんと一緒にしたるんわ、かわいそうやで眞悟のおっちゃん」

「そういえば知り合いのブログに幸福の科学の政党を「カルト党」

って書いて発信したら、その後1週間もしないうちにY A H O O 検索に文字化けページ張られたらしいわよ、その人のブログの検索に」

「厨房のいたずらちゃん？」

「小学生のケンカみたいなものよ。厨房のいたずらでも、幸福の科学のさしがねでも。どっちでも。」

「レベル低いなあ」

「そもそも、その知り合い、拉致被害者救済運動とかに混ざってたんだって。たしか幸福の科学の政党って党首が北朝鮮のことやたらに攻撃してなかったっけ？」

「よく調べもしないで嫌がらせしてるんだ。やったやつは相当アホだわ」

さえはみちるがそう言って焼酎を飲むのを横目に見て言った。

「一般的に利害対立がトラブルになるところでは宗教と政治の話はするなというわねえ」

「それは営業マンのセールス心得でしょ？選挙運動は自由よ」

「ケンカとかなるよ」

「祭りにケンカは付き物でしょう」

「選挙ってお祭り？」

「違うけどお祭り騒ぎになるわねよく。郵政解散とかのときもお祭り騒ぎだったもん」

「小泉劇場け」

「あのときに小泉、和泉丘駅に来たわよ。それで眞悟のおっちゃん小選挙区で岡下に負けたんよ」

「対戦成績の統計から見て今度の選挙は眞悟のおっちゃんに有利やる？」

「まあそうね、統計ではね」

さえはそう言った後、ゆかりごはんと豚平焼きを頼んでしれつとした顔をした。

第11話 紅茶

1930年8月、京都三条にリプトンがオープン。
リプトン紅茶の日本喫茶部として出発し、2009年現在も営業を
している。

創業から79年である。

「ほー。さえさん。そういう情報をどこで？」

「実際に京都で紅茶飲んできたわよ。アイステーストレート」

「京都駅の地下にも店があってね、そこで飲んだけど」

リプトン紅茶の向こうを張っていたといえばトワイニングとかだが、
そもそも日本へ自由に紅茶が輸入できるようになったのは1971
年。

まだ38年だ。

いまでは150円でペットボトルで飲み放題だ。

昔、それもアラフォーが子どもの頃には紅茶はそのリプトンを煮出
してアイステイーにするとか、喫茶店に飲みに行くしかなかった。
ペットボトルなんてね。

佐々木雅之はそう言いながらゆかりごはんと豚平焼きをさえの前に
出した。

「じゃあ、雅之さん、紅茶淹れられるんや」

「まあな。覚えると結構簡単よ。淹れ方とかをレシピで教えて貰っ
たことがあってね」

「ふーん」

「ま、葉を蒸らすことやね。」

さえはゆかりごはんをもぐもぐしながら、頷いた。

「京都のリプトンで紅茶パフェとかいただくと、ストローについてくるの」

「紅茶をそれで飲めということやね」

さえは頷いた。

「紅茶フロートみたいな感じだったわね」

雅之はうははと笑って、アイスティーをさえとみちるに出した。

「奢り」

さえとみちるは笑顔になって「ありがとう」と言い、出されたアイスティーを飲んだ。

第12話 職務質問（前書き）

自明な事実人は人を助ける。

第12話 職務質問

みちるはホームセンターで包丁を物色していた。

「文化包丁よりは牛刃かなあ」

そう呟きながら陳列フックに下がっているステンレスの刃渡り15cmの文化包丁を手にとった。

雅之がみちるに声をかけた。

「よくあるなあ、ホームセンターで包丁買って凶器の準備」

みちるはくすつと笑って言った。

「ベレッタ社の9mmセミオートなんか一般人が手に入れたらその時点で逮捕よ」

「おれ持つてるよ、ベレッタ」

「え？」

「いや、さる筋から手に入った。9mmセミオート」

「それって…」

「まあ、警察に知れたら留置所だろうなあ。取りあえず」

レジで文化包丁を買ったら、みちると雅之は鞆に入れてホームセンターを出た。

ホームセンターを出ると警官が立っていた。

「すみません、このあたりで14時ごろ強盗がありまして、ご存じないでしょうか？」

警官がいきなり尋ねてきた。

「職務質問ですか？」

みちるがそう言つと、警官は両手を前に出してちがうちがうというゼスチャーをした。

「ホームセンターで買い物してたんでわからなかったですけど」

「すいません、鞆の中身、見せて貰ってもかまいませんか？」

みちるは言った。

「文化包丁をさきほどそのホームセンターで買いましたが」

警官はそれを聞いて顔色を変えた。

「ちよつと署まで来て貰ってもかまいませんか？」

「あなた、自分の言ったことと、事実関係の把握もできないの？」

「はい？」

「さっきホームセンターで買った文化包丁で強盗するなら、その現場に付近から逃げてるでしょ？このレシート見てみなさいよ。ここにレジで文化包丁買った時間と店名書いてあるわよ。わたしがレジで包丁を買ったのは14時10分。どうやって強盗するのよ、そんな凶器で。タイムマシンにでも乗らないと無理よ」

そう言ってみちるは財布からホームセンターのレシートを警官に見せた。

警官はそれをまじまじとみて言った。

「失礼いたしました。お行きになって結構です」

一部始終を見ていた雅之は脱力気味に笑って言った。

「結構言つなあ、みちるちゃん」

「包丁買ったからって犯人扱いって、だから警察の犯人検挙率低いのよ」

雅之はへつと笑ってたばこに火をつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277c/>

ターンオーバー（私家版）

2011年7月6日07時18分発行